

秋田における「県民性」言説の創出と再生産

日高 水穂・石沢 真貴・近藤 智彦

Production and Reproduction of Discourse on “Prefectural Character” in Akita

Mizuho HIDAKA, Maki ISHIZAWA and Tomohiko KONDO

Abstract

The pattern of discourse well-established in Akita Prefecture, which explains various social phenomena by Akita people's “prefectural character (kenmin-sei)”, is exploited by the “Akita people ‘transformation’ project (Akita-jin ‘henshin’ project)”, launched in 2007 on the initiative of the Akita Prefectural Government. Akita people's “prefectural characters” as specified in the project proposal include “hiyamikogi” (“lazy” in the Akita dialect), which is in fact not counted as such in books on “prefectural character” published nation-wide. This kind of discourse on “prefectural character” has a political function of making people see social problems as their own, which can be made more effective by the use of dialect to express their (putative) blamable character, though at the great risk of concealing the real cause.

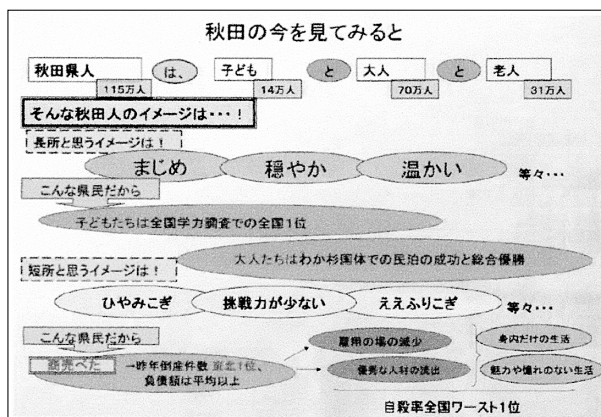
キーワード：県民性，ステレオタイプ，秋田人“変身”プロジェクト，イデオロギー操作，方言性向語彙

Key words：prefectural character (kenmin-sei), stereotypes, Akita people ‘transformation’ project (Akita-jin ‘henshin’ project), ideology control, character vocabularies in dialects

1. 秋田における「県民性」言説のあり方

2007年7月に秋田県は「秋田人“変身”プロジェクト」を立ちあげた。そこでは、秋田人の「県民性」について、「まじめ」「穏やか」「温かい」という〈長所〉とともに、「ひやみこぎ（怠け者）」「挑戦力が少ない」「ええふりこぎ（見栄っ張り）」という〈短所〉をあげ、「良いところは伸ばし、変えるところは変えていこう」と呼びかけている（「美の国あきたネット」より・図1参照）。

図1 「秋田人“変身”プロジェクトからの提言」
（HP「美の国あきたネット」より）



「県民性」の改善を政策上の課題とするということが、県によって公然と行われることに、強い違和感を覚えるが、行政レベルでこうした発想が生まれる背景には、秋田では、一般人の日常的な会話からマス・メディアの言論におけるまで、地域の社会事象を「県民性」を根拠にして説明するという語りのパターンが、すでに定着したのものとなっているということがある。

たとえば、文部科学省が実施した2007年度の全国学力調査で、秋田県は小学校6年生が全科目で全国一位、中学校3年生もトップクラスの好成績を上げたが、この結果を受けて要因分析をする県内の教育関係者のコメントに、次のようなものが見られる。

「先日の国体で、相手チームにも熱心に声援を送る子どもたちの姿があった。そういったまじめさ、誠実さが出たのかも」（『朝日新聞』秋田版，2007年10月25日）

本来であれば、その「まじめさ」「誠実さ」を育む地域社会のあり方や教育上の取り組みこそが分析されるべきところであるが、ここでは、「まじめさ」「誠実さ」が秋田の子どもたちに本来的に備わったもの、すなわち「県民性」であるかのように語られている。

次の例は、2007年9～10月に秋田で開催された国民体育大会（第62回大会・秋田わか杉国体）をひかえ、前大会（1961年開催の第16回大会）の思い出を、一般読者の体験談によって振り返るという連載記事の中から、開会式の様子を伝える投稿の一節である。

勤勉な県民性だったのだろう。本番は威風堂々、素晴らしい音響と一条乱れぬ吹奏行進。会場から大きな歓声と拍手を受けた。（『秋田魁新報』夕刊、2007年1月23日）

この例からは、こうした「県民性」に言及する語りのパターンが一般の秋田人の中にも定着していること、さらに、そうした言説をメディアが積極的に取り上げてきたことが読みとれる。

以上の2例は、地域にとって好ましい事象を説明する「県民性」言説であるが、秋田ではむしろ、地域の抱える社会問題に言及する際に、「県民性」を根拠とした説明が行われることが非常に多い。このとき、もっともよく引き合いに出される「県民性」は、「ええふりこぎ」という方言で表される性向である。

たとえば、現在秋田で問題となっている多重債務による自殺の問題を取り上げる新聞記事では、識者による次のようなコメントが紹介されている。

「秋田県民は『ええふりこぎ』とって、いい格好しいのところがあって、なかなか相談できないのでは」（『朝日新聞』秋田版、2008年9月1日）

同様に、「十年連続自殺率一位 秋田県の謎 豊かな自然に囲まれながらなぜ自殺率が高いのか」と題した雑誌記事においても、「地元の人々の口からは、県民性の問題が自殺率の高い理由としてよく出てくる」としたうえで、自殺問題に取り組む地元の精神科医の発言として、以下のものを挙げている。

「家族にまで弱音を吐けないほど、“ええふりこぎ”なのかと思いますね。私は患者の方へ弱音を吐ける強さを持つと言っているんですが」（『文藝春秋』2006年1月号）

こうしたメディアの言説は、「識者のコメント」という権威づけを伴った形で提示されるため、あたかも「根拠として正当なもの」のように見えるが、実は、こうした言説自体は、秋田でいつの頃からか定着し一般化した語りのパターンに従ったものであり、メディアはそれを記事に採用しているにすぎない。すなわち、秋田人にとって「おなじみ」の語りのパターンを、コメントする側も記事にする側も無意識のうちに採用し、「県民性」言説を再生産しているわけである。

そうした一般社会の志向性とメディアによる言説化の相互作用のメカニズムがわかる事例として、秋田方言の現状を伝える新聞記事の例を紹介する。これは、本稿の

執筆者のうちの一人である日高のコメントが記事になったものである。記事の内容は、東北から北陸にかけての日本海側沿岸方言の動態調査（2004～2005年に調査実施、2008年3月に報告書刊行）により、同じ東北地方でも青森や山形に比べて秋田の共通語化が著しい（正確には秋田市の共通語化が著しい）ことが明らかになった、というもので、以下は、共通語化が進む原因を述べた部分である。

研究に参加した秋田大の日高水穂准教授（方言学）は、他地域の人には秋田弁を出さないように心掛ける県民性を指摘する。秋田県人は「いいふりこぎ」（対面を重んじる、良い格好をする）だと言われる。「秋田弁は通じないのではと気を回し、使うことを控えているのではないか。『自分に合わせろ』という傾向の西日本とは、対照的だ」という。（『朝日新聞』秋田版、2008年8月29日）

「秋田弁危機」というややセンセーショナルな見出しの立てられたこの記事では、一見、秋田県全域で秋田弁が消滅の危機に瀕しているかのように見えるが、この調査で明らかになったのは、秋田県の中でも秋田市における共通語化の速さである。東北地方の日本海沿岸部では、秋田市がもっとも規模の大きい都市であり、そうした都市部で共通語化が進むのは、特殊なことではない。そしてそれは、人口の流動化による地域住民の緊密な関係の喪失など、都市に共通の社会基盤・志向性から説明できるものである。取材の際にはそうしたさまざまな角度からの見解を述べたのであるが、ここで注目したいのは、日高が記者に語った内容のうち、特に秋田の「県民性」について述べた部分が切り取られ、言説化されたということである。

この事例からは、メディアを通じた「県民性」言説の創出・再生産のメカニズムが見えてくる。

地域で生じる社会事象を、「県民性」によって説明するという語りのパターンは、秋田では一般に行き渡っている。メディアは、そうした一般社会で受け入れられやすい言説を選別し、公的な見解として提供する。そうしたプロセスを経る中で、当の「県民性」言説は、より強固なものとして定着していく。ここでは、もはや「秋田人は本当に「ええふりこぎ」なのか」は問題ではない。ある「県民性」言説が定着すると、さまざまな社会事象がそれによって説明されるようになる。いったん生み出された「県民性」言説が、次々に再生産されていくメカニズムこそが重要なのである。

なお、次章で見るように、「県民性」を話題として取り上げること自体は、現在、全国レベルのマス・メディアにおいても盛んに行われており、一種のブームとも言えるものになっている。しかしながら、秋田で行われる

「県民性」言説は、行政が積極的に「県民性」言説の創出と再生産に関与する、という段階にまで至っており、全国的に見ても特異なものと言わざるをえない。

ところで、秋田で語られる「県民性」言説を観察していると、「まじめ」「穏やか」「温かい」「誠実」「勤勉」といった〈長所〉とされる性向は共通語形で示されるのに対して、〈短所〉とされる性向に関しては「ええふりこぎ」や「ひやみこぎ」といった方言形が使用される傾向があることに気づく。こうした「県民性」を象徴的に示す方言性向語彙の代表的なものとしては、「津軽のじょっぱり」「土佐のいごっそう」「肥後もっこす」「沖縄のてーげー主義」などがあるが、「秋田のええふりこぎ（もしくはひやみこぎ）」は、これらに比べて県外での認知度は決して高いものとは言えない。つまり、「ええふりこぎ」や「ひやみこぎ」は、秋田人が自らに対して言及する「県民性」言説の中で特に使用されるものだということになる。それでは、秋田人が自らに向けて発する「県民性」言説において、「県民性」の〈短所〉を方言によって語ることに、どのような意味があるのだろうか。

本稿では、こうした秋田の「県民性」言説のあり方を検討することで、「県民性」言説の持つ社会的機能とその背後に潜む政治性および功罪について考察する。

以下ではまず、冒頭に挙げた「秋田人“変身”プロジェクト」の取り上げる秋田の「県民性」—「まじめ」「穏やか」「温かい」という〈長所〉、「ひやみこぎ」「挑戦力が少ない」「ええふりこぎ」という〈短所〉—が、従来の—とくに内向きの視点からではなく全国的な外の視点からの—「県民性」言説の中では、どのような現れ方をしてきたのかを見ていこう。

2. 「県民性本」における秋田人の「県民性」

近年、書店の書棚には（さらにコンビニエンス・ストアにも）、全国各都道府県民の「県民性」を取り上げた本（以下「県民性本」）が数多く並んでいる。試みに国立国会図書館蔵書検索（NDL-OPAC）¹⁾で「県民性」をキーワードにして検索し（2008年11月末の時点で全76件）、その中から特定の県民の「県民性」のみを扱っていると考えられるもの（『岐阜県の県民性』など・全20件）を除いた件数を年代別に挙げると、表1のようになる。

表1 「県民性本」の出版点数の推移

1960年代	1
1970年代	3
1980年代	2
1990年代	10（うち1995年以降9）
2000年代	40

「県民性本」の爆発的な流行が、1990年代後半にはじまり現在まで続いていることがわかるだろう。このような「県民性本」ブームの一端は、1970年代に出版された複数の書籍が、1990年代後半以降に再刊行されていることにも表れている²⁾。

このような「県民性本」において、秋田人の「県民性」はどのように論じられているのだろうか。ここでは、全都道府県ごとにそれぞれの「県民性」を紹介している本のうち、1970年代のものから3冊、1990年代のものから1冊、2000年代前半のものから6冊、2000年代後半のものから3冊の、以下に挙げる計13冊を調査した。

1970年代（3冊）

- [1] 祖父江孝男『県民性：文化人類学的考察』中央公論社、1971
- [2] 樋口清之『出身県でわかる日本人診断』新潮社、1973（樋口清之『出身者別 日本人の性格と行動パターン』新潮社、2003）
- [3] NHK放送世論調査所編『日本人の県民性：NHK全国県民調査』日本放送出版協会、1979

1990年代（1冊）

- [4] NHK放送文化研究所編『現代の県民気質—全国県民意識調査—』日本放送出版協会、1997

2000年代前半（6冊）

- [5] 堀五郎『真説県民大図鑑』扶桑社、2000
- [6] びっくりデータ情報部編『県民性：恥ずかしすぎる本当の話』河出書房新社、2000
- [7] 日本人を知る研究会『県民性の統計学』角川書店、2002
- [8] 矢野新一『県民性でわかる相性のいい奴、悪い奴』あ・うん、2003
- [9] 山下龍夫『県民性の謎がわかる本』幻冬舎、2003
- [10] 岩中祥史『出身県でわかる人の性格：県民性の研究』草思社、2003（岩中祥史『出身県でわかる人の性格：県民性の研究』、新潮社、2007）

2000年代後半（3冊）

- [11] 千石涼太郎『出身県はなぜバレるのか?』リイド社、2005
- [12] 日本世相調査研究会『データが教える日本の県民性』日本文芸社、2007
- [13] 博学こだわり倶楽部『県民の品格』河出書房新社、2008

以上の「県民性本」の中で、秋田人の「県民性」（な

いし「県民性」に関係する事柄)とされているものから、 主なものを挙げると表2のようになる。

表2 「県民性本」に記載された秋田県人の「県民性」と「県民性」に関係する事柄

記載内容	1970年代			1990年代	2000年代前半						2000年代後半		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
「享乐的」「エピキュリアン」「遊び好き」 「消費性(癖)が強い」「消費性向が高い」 「消費的」「お金を使うことを惜しまない」 「気前がよい」	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
「保守的」「封鎖的」「家柄意識が強い」「周囲の目を気にする」	○		○	○					○	○	○		
「見栄っ張り」							○	○		○		○	○
「優柔不断」「なかなか決断がつかない」 「鈍重」	○	○			○			○	○				
「まじめ」「道徳観がきびしい」			○	○				○	○				
「粘り強い」「忍耐強い」	○		○		○			○					
「温かい」「お人好しで親切」「和やか」				○					○		○		
「酒の消費量が多い」「酒好き」「酒豪」	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○
「秋田美人」		○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
「(歴史的に)米に恵まれていた」「豊かに暮らしてきた」「おいしいものをたくさん食べ、呑気に生活できた歴史」「江戸期にバブリーな一時代を過ごした」など	○			○		○	○			○	○		○
「(人口あたりの)理容室・美容室の数(が全国一)」					○	○	○			○		○	○
「秋田犬」	○				○								
「なまはげ」		○											

秋田人の「県民性」としてほとんどの本で認められているのは「享乐的」という性格だけであり、他の項目についてはかなりばらつきがある。これは、秋田人の「県民性」については、全国的な共通理解となるような確固たるイメージがあまり形成されていないということを示唆している。

「秋田人“変身”プロジェクト」で取り上げられた「県民性」を見てみると、「まじめ」「温かい」という性格は「県民性本」でも見られるが、残念ながら散発的である。それ以上に注目すべきは、「ひやみこぎ」にあたる性格が、少なくとも以上で検討した「県民性本」の範囲内ではまったく見られないという点である。この点については、秋田人の「県民性」についての確固たる共通理解はあまり存在しないという事情が、たとえば「ひやみこぎ」が(新たに?)秋田人の「県民性」として導入されても、それが抵抗なく受け入れられることを可能にしていると思われる。「県民性本」では、秋田人の「県民性」として「まじめ」「粘り強い」といった性格を挙

げているものもあるが、もしこれがもっと確固とした共通理解となっていれば、そのような性格と反すると思われる「ひやみこぎ」を秋田人の「県民性」とする見方はそもそも受け入れられなかっただろう。

それでは、これら「県民性本」における「県民性」の語られ方には、どのような特徴があるだろうか。

1で指摘したように、「秋田人“変身”プロジェクト」では、秋田人の「県民性」とされるもののいくつかは、方言の形で挙げられている。それに対して、少なくともここで検討した「県民性本」の範囲内では、方言で秋田人の「県民性」を表す記述は見られなかった。たとえば複数の文献で挙げられている「見栄っ張り」という性格は、「ええふりこぎ」という方言を用いて表現することも可能であったはずだが、そのような書き方はしていない。この点は、「県民性本」が対象としている読者と「秋田人“変身”プロジェクト」の対象との違いによると思われる。すなわち、「秋田人“変身”プロジェクト」の方は秋田人自身に向けられているのに対して、「県民性

本」は基本的に外からの視線に向けて書かれているという違いである。「県民性本」においても、他の都道府県の「県民性」の記述を見ると、高知県の場合の「いごっそう」、熊本県の場合の「もっこす」のように、方言で表現されている「県民性」もある（いずれもそれぞれ13件中12件に記載）。しかしこれは、「いごっそう」や「もっこす」が「ええふりこぎ」とは異なり、全国的に（つまり外からも）知られていることによると考えられる。

「県民性本」の議論の特徴として次に指摘しなければならないのは、「県民性」として挙げられるものの範囲の恣意性である。「県民性」という語は本来、その県民に共通ないし特有の「性格」を意味するはずであるが、「県民性本」には「性格」とは言えないようなものも合わせて扱われている。秋田県の場合、本来「県民性」とは呼べないはずの「秋田美人」への言及が、大部分の本で見られる。本によっては、「秋田美人」は「溫柔で家庭的、忍耐強く、よく男につくしたので、昔から日本の男にとって理想の女性像の一つだった」と述べ、性格と結びつけようと試みているものもある（[2]:88）。しかし、このような結びつけ方自体が、恣意的であると言わざるをえないだろう。また別の本では、「酒がおいしく、おまけに女性は「秋田美人」とくれば人生が楽しくないはずはない」と論じ、「秋田美人」の存在を秋田人の「楽天的な気質」の原因の一つとして挙げている（[9]:44）。しかしこのような議論が、元来「秋田美人」と無関係に指摘されてきた秋田人の「県民性」を、「秋田美人」と強引に結びつけた「後付け」の論理であることは明らかである。

また、「秋田美人」の場合よりも数は少ないが、秋田人の「粘り強い」「県民性」を「秋田犬」になぞらえている本もある。これも、全国的に知られた「秋田犬」に基づいて「県民性」を創出した「後付け」の論理であろう（「秋田犬」についての記述が2000年代以降の文献にほとんど見られないのは「秋田犬」の知名度の低下によるか）。また、同じく秋田県の名物である「なまはげ」などの行事を取り上げ、それらが「県民性の底に情熱的で豪放な一面が秘められていることを物語っている」と論じている本もある（[2]:91）。しかし、「情熱的で豪放」という性格を秋田人の「県民性」として挙げている本が他にないことは、その見方が「なまはげ」などの行事の性格に基づく著者の勝手な憶測にすぎないことを示している。

この種の「疑似論理」に満ちていることが、「県民性本」の議論の最大の特徴と言える。そのあらわれとして興味深い例となるのが、次のような離婚率をめぐる2つの本の議論である。[1]は、戦前の秋田県では離婚率が高かったことを指摘して、「戦前の離婚率は最も高く、家中心主義の圧力が重くのしかかっていたようだ」と論じ

ている（[1]:95）³⁾。それに対して[10]は、「つねに周囲の目を気にし、結婚相手も地元からということになれば、離婚率がひじょうに低い（第四二位）というのもうなずける」と論じている（[10]:64）。「家中心主義の圧力」と「つねに周囲の目を気に[すること]」とは完全に同一ではないかもしれないが、いずれも家庭や社会の閉鎖性を指摘している点で重なると考えられる。しかしこの点が、前者では離婚率の高さの理由として挙げられ、後者では離婚率の低さの理由として挙げられているのである。両者の議論がいずれも不思議なことに、一定の説得力をもっていることは事実である。しかし実際には、同じ事柄が相反する2つの事柄の理由になるはずはないのである。

同じような「疑似論理」性は、秋田人の「県民性」をさまざまな仕方で根拠づける議論にもあてはまる。たとえば、「享乐的」「消費性が強い」といった「県民性」の理由を、秋田県が米に恵まれ経済的に豊かであったという歴史的事実に求める議論は、多くの本に見られる（[1]:94, [7]:24, [9]:44, [10]:59, [13]:24）。このような議論は、「県民性本」の間で受け継がれているいわば「トポス」となっている。しかし、「当時[江戸時代]からつちかわれた、いわばバブル的な生き方がいまなお色濃く残っている」と言われても、にわかには信じがたい（著者も慎重に「かもしれない」と付け加えたりしているが）（[10]:59）。また、人口あたりの理容室・美容室の数が全国一というデータは、「秋田美人」と何らかの仕方で結びつけて論じられることが多い「トポス」であるが、さらにこれを「享乐的」ないし「見栄っぱり」という「県民性」と結びつける本もある（[7]:24）。しかし、理容室・美容室の数が多くことに対しては、「見栄っぱり」という「県民性」以外に理由を求めることもできるだろう（この点については、[5]が、「県民性本」に対する自嘲を込めて、「女性の雇用の観点からこのデータを解釈する方が合理的」という意見を併記していて興味深い（[5]:227））。

「県民性本」に見られるこのような「疑似論理」を一々あげつらうのは、野暮なことかもしれない。「県民性本」は、その論理の危うさを半ば自覚しつつ楽しむためのものとみなすべきだろうからである。しかし、それが純粋な娯楽にとどまらずに、場合によっては「毒」を含みうる点を見逃してはならない。おそらく最近の「県民性本」ブームに影響をうけて、2007年10月から「カミングアウトバラエティ：秘密のケンミンSHOW」というTV番組が放映されている⁴⁾。これは、性格分類をネタにしているという点で、かつて人気があったが批判を受けて放映されなくなった「血液型バラエティ番組」の後釜を狙ったものと考えられる。この「血液型バラエティ番組」が問題とされたのは、主に、血液型による性

格分類が疑似科学に基づいている点と、ステレオタイプに基づく特定の集団（たとえば「B型」）への蔑視を助長するという点であった。興味深いことに、最近の「県民性バラエティ番組」でも、特定地域の集団（「大阪人」）に対する蔑視的な語り方が執拗に繰り返されている。このような「毒」が一種の面白味を生むのも事実であるが、もはやまったく害がないとは言えないだろう。この「毒」が、大げさに言えば「政治的」な色合い（たとえば「大阪」と「東京」の力関係）を帯びている点も見逃せない。これが「国民性」や「民族性」をめぐる言説であれば、政治的な意味をもちうることは明らかだろう。「県民性バラエティ番組」に見られる特定の都道府県民への蔑視的な語り方は、それだけ見ればさほど問題があるとも思えないかもしれない。しかし、もしそれが、インターネット上で一部の心ない人々によって執拗に繰り返されている隣国の人々に対する蔑視的な書き込みと、同じ精神構造から発しているとしたらどうだろうか。また、今後の政治・社会情勢の変化次第では（たとえば道州制論議において）、「県民性」が政治的に利用される可能性はある⁵⁾。次章で検討する「秋田人“変身”プロジェクト」は、その第一歩と言えるかもしれない。だからこそわれわれとしては、「県民性」をめぐる言説がもちうる「毒」と、その「毒」に根拠を与える「(疑似)論理」に注意を払う必要があるのである。

3. 「秋田人“変身”プロジェクト」における「県民性」言説の創出

前章で示唆されたように、「県民性」は、政治的に利用される可能性はあるのだろうか。本章では、冒頭でも触れた「秋田人“変身”プロジェクト」をとりあげ、「県民性」言説の政治性について検討してみたい。

この人目を惹く名のついた事業は、その報告書等にまとめられた提言そのものの内容、方向性をみるかぎり、一般的な男女共同参画事業や地域活性化事業と軌を一にするものにみえ、「市民教育」や市民参加による「まちづくり」活動の一環として位置づけられる。つまり、とりたてて「県民性」なるものを持ちだす必然性はないように思われる。秋田県民の〈短所〉をあげてまで推進されようとしているこのプロジェクトとは、いったいどのような動きとして考察できるのであろうか⁶⁾。

(1) プロジェクトの成立経緯とこれまでの動向

2007年7月12日、秋田県総務企画部総合政策課は「秋田人“変身”プロジェクト」なる研究会を発足させた。これは「県民と一緒に考える秋田の将来研究会」（以下「将来研究会」）⁷⁾における3テーマのうちの1つである。この「将来研究会」は、そもそも、秋田県の『あきた21総

合計画』において平成17年度から3年間にわたる「元気なふるさと秋田づくり」推進の一環で、県民自らが自主的・主体的に推進する県民運動という位置づけとして計画されたものである（秋田県2006:321）。最終年度の3年目にあたる平成19年度計画で、「アジアと共に発展する秋田のグローバル戦略」、「官民協働で担うこれからの『公』って何？」というテーマとともに、この「秋田人“変身”プロジェクト」があげられた。つまり、「秋田人“変身”プロジェクト」は、れっきとした秋田県の事業の一環である。しかし、他2つはグローバル化や住民参加による協働を課題とする一般的な事業であるのに対し、「秋田人“変身”プロジェクト」は、その名称もさることながら、イメージされる内容も、ある種異色の事業であったことは一目瞭然である⁸⁾。

このプロジェクトの展開経緯を追ってみよう。まず、プロジェクトのメンバー選出であるが、「県民と一緒に考える秋田の将来研究会 設置要綱」によれば、一般県民、民間企業及び県職員等から募集し、経歴や、資格、得意分野などを考慮して選出することになっている。これに基づき県のHP等やテレビ、新聞を通してメンバーを募集し、40名の応募者があった。上記の基本的な選出条件に加え「秋田人“変身”プロジェクト」では県外在住経験のある県民という条件を加え20名を選出し、2グループに分けてそれぞれが変身プロジェクトについて考えるというかたちをとった。表3は研究会メンバー決定以後、主なプロジェクトの展開経緯を示したものである。

表3 「秋田人“変身”プロジェクト」の主な展開経緯

2007年7月12日	「秋田人“変身”プロジェクト」研究会の発足
2007年9月4日～10月21日	秋田県人にまつわるエピソードの募集 ～このころ新聞、テレビによる報道が増える
2007年11月8日～20年2月28日	県民性についてのアンケート調査「秋田人変身プロジェクトについて」の実施
2008年1月13日	第1回秋田人変身プロジェクト公開フォーラム開催 ～フォーラム開催時会場にてアンケート実施
2007年度末	プロジェクト終了
2008年度	具体的な「変身」に向けたプロジェクトの始動
2008年7月16日	「秋田人変身力会議」の発足 ⁹⁾
2008年8月2日	「キャラクターマスコット大集合in大館」開催 ¹⁰⁾

(2) アンケート調査結果にみる「県民性」

1) 多様な「県民性」についての意見

プロジェクトの活動は、2007年9月から10月にかけて秋田人の「県民性」についての体験談を募り、さらに11月から2月にかけて県のHP「美の国あきたネット」上でアンケート調査¹¹⁾を行うところから始まった。まずは県内外から秋田人の「県民性」についての意見を集め、その〈長所〉と〈短所〉を再認識しようと試みたのだ。そのアンケート調査結果から、「県民性」をみとめることにしよう。

2007年度末の報告書にまとめられている「県民性」についてのアンケート調査内自由記述欄から、プロジェクト研究会によって抜粋された回答例をみてみよう(表4)。これらを見るかぎり、アンケートの回答は、実はかなり多様な、幅のある表現で書き込まれていることがわかる。他にも2007年9月4日～10月21日まで募集されたエピソードを読めば、さらに幅広い秋田人の存在を物語る内容となっていることがわかる(県民と一緒に考える秋田の将来研究会2008a参照)。

表4 「県民性」に関する自由記述回答の例示

- ◆協調性と横並びという感じ。本当の意味での優しさや暖かさは少ない。
- ◆おもてなしの心がスゴイ。
- ◆頑固で真面目。
- ◆長所が表面に表れることは少なく、損をしていると思う。
- ◆気前はいいですね。見栄っ張りに通じるものがあるけど。女性は決断力がある。秋田の女性と結婚すると県外の男性は成長する。
- ◆商売が下手。自己表現力に乏しい。
- ◆自分のテリトリー内では多弁。他に出ると全く意見を言わなくなる。
- ◆一発の考えで終わり、取り組み姿勢には熱しやすく、冷めやすいと思う。
- ◆まわりの目を気にし過ぎ。そこがよいところかもしれないが…。
- ◆空気を読みすぎる。馬鹿になる勇気が足りない。いい子でいたい。

HP「美の国あきたネット」アンケート結果より抜粋

出所：県民と一緒に考える秋田の将来研究会「秋田人変身プロジェクト 変わるか秋田人。」より作成

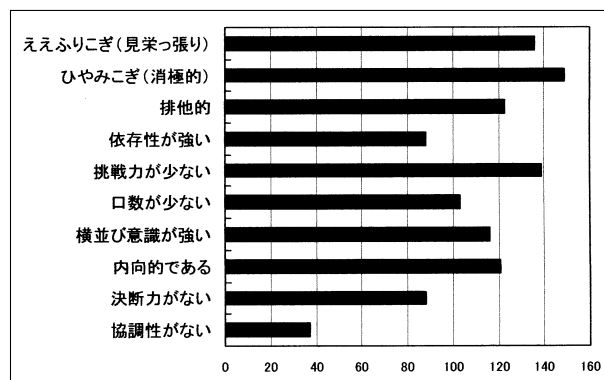
2) アンケート項目の恣意性

しかし、一方で、同アンケート調査の選択肢による調査結果をみると、「県民性」についての〈長所〉と〈短所〉のそれぞれ上位3項目は、「まじめ」「暖かい」「穏やか」という〈長所〉と、「ひやみこぎ(怠け者)」「ええふりこぎ(見栄っ張り)」

という〈短所〉があげられている。ここで注目すべき点は、〈長所〉は「まじめ」「穏やか」「暖かい」という共通語で表現されているのに対し、〈短所〉には「ひやみこぎ(怠け者)」「ええふりこぎ(見栄っ張り)」という方言が使われていることである。しかも、〈短所〉の方は、調査票の選択肢配置上、最上段の1項目めと2項目めに、この方言による項目「ひやみこぎ(怠け者)」「ええふりこぎ(見栄っ張り)」がおかれている(図2)。つまり、選択肢によるアンケート調査の「県民性」は、恣意的な表現ですでに用意された方言性向語彙を最も目立つ位置に配置していた結果、回答者がそれらを選ぶ確率がより高くなった可能性を否定できない。そのことによって、本来多様なはずの「県民性」はマイナス面が強調される結果になった。

そもそも、2における「県民性本」の「疑似論理」という問題でも触れているように、「県民性」とされている性格そのものも、当然のことながら真に「県民性」を捉えているものとはいい難い。なにしろ、「ひやみこぎ」や「ええふりこぎ」に相当する人々は、世界中いたるところに存在するのだ。

図2 秋田県民気質について短所だと思うこと(単位:人)



出所：「美の国あきたネット」上アンケート「秋田人“変身”プロジェクトについて」より作成

(3) 結論ありきの「変身」内容?

1) プロジェクトがまとめた「県民性」と4つの提案

前述のアンケート結果に加え、プロジェクトでは2008年1月の公開フォーラムにおいても「県民性」についてあげてもらったアンケート調査を行った。それら幾つかの調査結果を総合し、「将来研究会」の話し合いの結果としてまとめられた、プロジェクトによる秋田人の「県民性」は、以下の項目である(表5)。

表5 プロジェクトによる「県民性」の〈長所〉と〈短所〉

◆長所（伸ばすべきところ）
● 家族（家庭）の絆の強さ
● あたたかい心を持っているところ
● 我慢強いところ
◆短所（変えた方がよいところ）
● しょしがるところ（恥ずかしがる）
● 殿様気質（トップたる会社経営者などが率先して手本を示すべきでは）
● 酒を飲まないとしゃべれないところ
● 嫌なコトは先送りするところ

出所：県民と一緒に考える秋田の将来研究会「秋田人変身プロジェクト 変わるか秋田人。」より作成

そして、「良いところは伸ばし、変えるところは変えていこう」と呼びかける¹²⁾。研究会は、これらを通して、「次なるステップへ」と称し、現状を把握し、変わる必要があるのかないかを検討し、大きく2つのプロセスで今後の研究会活動を展開することとした（表6）。

このステップを受け、仕事面と家庭面で「変身」を考えることになり、そこから以下の「4つの変身」の提案がでてきた（表7）。

表6 「次なるステップへ」の提示

Step1：県民性の長所や短所について『気付く場や考える場づくり』と『話し合う』ことの啓発
Step2：『変身を促す、推進する』具体的な『変身プラン』の提案

出所：県民と一緒に考える秋田の将来研究会「秋田人変身プロジェクト 変わるか秋田人。」より作成

表7 4つの変身の提案

1 子供からの変身（子どもが変える秋田の未来！）
2 家庭の変身
3 男の変身
4 リーダーの変身

出所：県民と一緒に考える秋田の将来研究会『秋田人変身プロジェクト 変わるか秋田人。』より作成

この4つの変身の提案をよくみてほしい。本章では、ここまで、「秋田人“変身”プロジェクト」の経緯と議論内容を追ってきた。そして、秋田人を仕事と家庭の面で変えようという方向までがみえてきた。しかし、この4つの提案から、仮に「県民性」や秋田人「変身」の目的を取り除いてみたとしても、それらがいわゆる市民教育の類のキャンペーンとして、そのまま違和感なく提示できる内容であることに気づきはしないだろうか。たと

えば、「家庭の変身」は、「絆づくり」の問題であり、「男の変身」は、いわゆる男女共同参画事業が推進するジェンダー問題への方策となり、「リーダーシップ育成」は、地域活性化策としての人材育成である。これらは、方言性向語彙によって強調された「ひやみこぎ」などの「負の県民性」から直接的に導きだされるような提案とは言いにくい。

2) 「秋田人“変身”プロジェクト」の抱えた矛盾

さらにいえば、報告書の冒頭で、プロジェクトは、秋田人氣質のマイナス面が改善されてきたという話を聞かない、と言っている（県民と一緒に考える秋田の将来研究会2008b：1）。このことは、暗にマイナス面は改善されるべきという意味合いを含むものと解されるのだが、一方で、「秋田人がダメだから変えるといった県民性を否定するものではない、決してありません。」と言う（県民と一緒に考える秋田の将来研究会2008b：2）。また「県民性」の謎を探る検証であるとか、歴史的背景の究明は行っていないとも明言している。

つまり、このプロジェクトは、「県民性」そのものの追究はしない、そしてマイナス面の指摘を受けてそれを変えようと意図するものではないといいつつ、「変えるところは変えていかなければならないという認識」をもって望むという、立ち上がりの時点ですでに「県民性」をめぐる奇妙な矛盾を抱え込むプロジェクトであったことになる。「秋田人“変身”プロジェクト」の目的である「なぜ秋田人は“変身”しなければならないのでしょうか？」（県民と一緒に考える秋田の将来研究会2008b：2）という問いの真意は、いったいどこにあるのだろうか。

3) 「負の県民性」の政治的利用

それにしても、なぜ提案はリーダーシップや男女共同参画に結びついたのであるだろうか。本稿は、もちろん、秋田県民の意識を変える、地域を活性化させるといった目的そのものを否定するものではない。社会を大きく変革する必要のあるときには、意識改革を通じた人材育成の意義は確かにある。しかし、このプロジェクト活動にみるように、秋田人の「県民性」を方言によって示してまでマイナス面をあげつらう必要性はどこにあったのだろうか。「変身」を実践に移す段階にきて、このプロジェクトの展開と、それまで行ってきた「県民性」議論との関連は、突如として分断されてしまったかのようにみえる。結局のところ、このプロジェクトは、「結論ありきの変身」だったのであるだろうか。

そうなると、なぜ「県民性」はとりあげられたのか。つまるところ、4つの提案が解決しようとするさまざま

な社会的課題は、「県民性」に帰することには明らかに無理があるということになる。たとえば地球規模での社会経済構造の変動が影響する地域社会の停滞は、当然のことながら「県民性」を変えて地域活性化に取り組めば解決できる類の問題ではない。ただ、啓蒙活動によってイデオロギー操作をすることは、統制側の常套手段ではある。そこに今回は「負の県民性」が方言という表現を介して差し込まれることにより、県民意識を負の払拭へとゆり動かしていく契機にはなりうる。これは、結果的に、前章で指摘された、「県民性」が政治的に利用されるということに結びつくように見える。すなわち、「県民の意識改革による地域活性化」を目的とした、行政主導の県民運動による「県民性」言説の創出である。

もちろん、行政主導による「県民性」言説の創出というのは、誰しもがその有効性に疑問を抱くところではあろう。また行政主導というよりは、県民代表により構成された「将来研究会」によって、以上のような「県民性」が結論づけられている経緯もある。しかし、「秋田人“変身”プロジェクト」とそれを実施するための関係課・室・チームをみると、総合政策課をはじめ、義務教育課、情報公開センター、産業経済政策課、高校教育課、安全・安心まちづくり推進課、県民文化政策課、男女共同参画課、生涯学習課、観光課、食彩あきた推進チームが示されており、仮に後付けであるにせよ4つの提案と関係課等とはみごとに対応関係をなしている（秋田県2005）。

プロジェクトの活動は、結果的にどのような機能を果たしたのであろうか。それは、「将来研究会」メンバーやアンケートの自由記述回答者、フォーラム参加者の個人的経験による秋田人の〈短所〉—「負の県民性」の拾い出しや、さらに公開フォーラムなどのイベント開催を通して、「負の県民性」を創出し、それによって秋田人のステレオタイプをつくりだしていった。そしてこの画一的なステレオタイプへの秋田県民の封じ込めは、行政による統制である「県民性」の政治的利用、すなわち結論ありきの4つの変身の提案を推進するための根拠として機能したことになる。

4. 「県民性」言説の功罪

1で見たように、秋田では「県民性」によって地域の社会事象を説明するという語りのパターンが、すでに定着したものとなっている。「秋田人“変身”プロジェクト」は、そうした土壌の上に成立したものである。

ただし、2で見た「県民性本」によれば、「秋田人“変身”プロジェクト」が秋田人の〈短所〉とする「ええふりこぎ（見栄っ張り）」と「ひやみこぎ（怠け者）」では、前者に関する記載は（共通語の「見栄っ張り」の

表現で）認められるものの、後者についてはいっさい記載が見られない。このことから、「秋田人“変身”プロジェクト」では、「ひやみこぎ」を秋田の「県民性」とする新たな「県民性」言説の創出が行われたものと見なせる。そしてその意図は、3で見たように、「県民性」を政治的に利用するところにある。

ところで、「ええふりこぎ」や「ひやみこぎ」は、実際の方言使用場面では、どのような意味合いで使用されるものなのであろうか。

「ええふりこぎ」については、『お国ことばのふしぎ大事典』という方言を素材にした一種の「県民性本」の記述が参考になる（この本では「いいふりこぎ」で立項されている）。

“すぐ格好つけたがる人”または“必要以上に体裁を気にする人”のことを、秋田では「いいふりこぎ」と言います。分不相応な服を着て自慢するような人に対し、吐き捨てるように使うのがコツです。（中略）用例：「トラクターさカーナビつけだあ？ いいふりこぎが（トラクターにカーナビを付けた？ 格好つけたがりが）！」「振られたってが？ いいふりこいでっからだ（振られたのか？ 格好つけてるからだ）」（ハイパープレス2000：30-31）

この記述に見られる解説と用例は、「ええふりこぎ」が用いられる典型的な場面をよくとらえていると思われる。すなわち、「ええふりこぎ」は本来、秋田人が自らの性格を自己認識する際に用いられる語ではなく、他人の派手な服装や生意気な態度を批判する際によく用いられる語なのである。このことは、秋田の地域規範の中では「ええふりこぎ」は好ましくないものと認識されており、秋田人は他人からそうした評価を受けないために、自己規制を働かせるようになることを推測させる。

「ひやみこぎ」は、「せやみこぎ」とも言い、「背病む」すなわち「仕事を前にして背骨が病気におかされていると言わずける」（中山2001：828）という意味の語に基づくものである。秋田にはこうした「ひやみこぎ」をいさめる伝統行事として「なまはげ」があるが、言うまでもなくこの行事は、秋田人が「ひやみこぎ」であることを示すものではなく、「ひやみこぎ」を嫌う地域規範が、伝統的に存在してきたことを示すものである。

こうした人の性向を表す性向語彙は、方言社会においては、プラス性向を表す語彙量よりもマイナス性向を表す語彙量の方が圧倒的に多いとされる。これは、方言性向語彙が「対人評価語彙として機能するだけでなく、同時に、自らが行動する場合の行動モラルの具体的な指標としても機能するものである」ことによる（室山2001:6）。つまり、マイナス性向を表す方言性向語彙は、その方言社会で好ましくないと考えられている人の性向を表すも

のなのであり、決してその方言社会の構成員に共通する性向（すなわち「県民性」）を表すものではないのである。

ここで、こうした方言性向語彙による「負の県民性」をあえて創出した「秋田人“変身”プロジェクト」の功罪について、あらためて考えてみたい。

3でも述べたように、子ども、家庭、男、リーダーに「変身」を求めるこのプロジェクトの4つの提案は、秋田に限らずどの地域社会においても、共通に政策上の課題となり得るものである。「県民性」に起因する問題として議論するまでもなく、地域活性化のための提言として一般的に成立するものであろう。

では、こうした提案が「県民性」と結びつけられて語られることの「効果」としては、どのようなことが考えられるだろうか。そこには、「県民性」という仮想の集団的性向を設定することによる、「当事者」意識醸成のメカニズムが潜んでいるように思われる。3にみたような4つの提案を、「秋田の活性化のための提言」として示しただけでは、どこでも成立し得る課題であるだけに、県民にとって切実な問題としては受け止められない。ところが、こうした提案が、秋田の「県民性」に起因する課題である、とされれば、その課題は、秋田県民にとっての固有の課題、という受け止め方がなされるようになる。そうした「当事者」意識を引き出す装置として、「県民性」言説は機能するのである。

「県民性」の〈短所〉を表す語が方言であるのは、そうした「当事者」意識をかき立てるものとして、方言が機能するからである。この場合、変える必要のない〈長所〉は、共通語であってもかまわない。変えるべき〈短所〉を方言で提示することによって、「ひやみこぎ」「ええふりこぎ」が、自分たちの乗り越えるべき悪弊であると認識させられるのである。これが、「怠け者」「見栄っ張り」という共通語で示されていたとすれば、抵抗感を感じるだけで、とても自分たちの問題としては認識できないだろう。

ここで繰り返し強調しておきたいのは、方言に存在する性向語彙は、地域社会で認識されている性向を示すものであって、「県民性」そのものではない、ということである。秋田の中に、「ひやみこぎ」「ええふりこぎ」という評価を受ける人が存在するとしても、それは秋田人に共通する性格では決してない。重要なのは、秋田ではそうした性向に名称を与え、ある場合は忌避し、ある場合は自嘲したりするなど、さまざまな感じ方でそうした性向を認識しているということ、さらにそれらの語を「秋田弁」（＝自分たちの固有の言葉）として認識しているということである。そうした県民意識を巧みに刺激し、利用するのが、「秋田人“変身”プロジェクト」なのだ

と言える。

「県民性」言説は、地域の社会事象の説明装置として機能する。地域で生じる社会事象が、実際には他の地域にも見られるものであったとしても、「県民性」を持ち出すことで「地域固有の社会事象」であると認識される。そのメカニズムを補強するものとして、方言性向語彙は機能しているのである。

こうしたメカニズムをあえて「県民性」言説の「功」の側面だと理解したとしても、やはり「罪」の側面についても指摘しないわけにはいかない。

地域の抱える社会問題を「県民性」に起因するものとして処理することは、ともすれば、当該の社会問題の真の原因を探究する目を曇らせる。「県民性」に根拠を求めることで、真に問題とすべき「敵」を見誤る可能性が大きいことは、十分に自覚する必要があるだろう。

[注]

- 1) <http://opac.ndl.go.jp>
- 2) NHK放送世論調査所編『日本人の県民性：NHK全国県民調査』日本放送出版協会、1979、NHK放送世論調査所編『日本人の県民性1979年版—NHK全国県民調査—』大空社、1997。樋口清之『出身県でわかる日本人診断』新潮社、1973、樋口清之『出身者別 日本人の性格と行動パターン』新潮社、2003。
- 3) 同著者の『県民性の人間学』新潮社、2000: 57でも、この点について「どうもはっきりした答えが得られていない」としながらも、「親戚づきあいが特に濃く、外から入ってきた嫁にはなかなか打ちとけないというようなことがあったのではないかと私は考えている」と記している。
- 4) http://www.ytv.co.jp/kenmin_show/
- 5) 2008年3月1日に秋田大学で開かれた「『秋田学』シンポジウム」で、パネラーの一人であった秋田県総合政策課長増田圭氏から、「道州制導入が現実味を帯びてきた今、県のアイデンティティを確立しておくことが大切」という旨の発言があった。
- 6) 「秋田人“変身”プロジェクト」については、秋田県総務企画部総合政策課に対して行った聞きとり調査（2008年6月実施）および収集資料等に基づき記述している。
- 7) 「将来研究会」は、平成17年度から19年度まで、「県民と県が一体となって、元気な秋田づくりに取り組むため、県民や県職員が一緒に知恵と工夫を出し合い、県への政策提言を行う」趣旨・目的をもって設置されたものである。秋田県（2006）「設置要綱」参照。
- 8) プロジェクトのユニークさゆえに、報道としては2007年6月にyahooニュースで取り上げられて以降、同年10月12日『朝日新聞』「秋田の沈滞 県民性のせい？」など新聞記事やNHKのニュース報道（10月に複数回）で取り上げられている。そして、2008年1月13日のフォーラム開催直前の1月5日に共同通信による配信がきっかけで全国的に広まった。
- 9) 「リーダー育成 秋田を元気に」『秋田魁新報』2008年7月

17日参照。リーダーの変身で、組織活性化をねらう活動の展開として位置づけられる。

- 10) 「地方点描 『大館発』『秋田魁新報』2008年6月18日参照。「将来研究会」構成メンバーで結成された「秋田人変身プロジェクト推進協議会」による『「自ら実践する」ための第一弾イベント』として実施。
- 11) アンケート調査結果の概要を記しておく。回答者数は279人で、県内居住者が69.2%（193人）を占める。約7割が男性（190人）。最も多い年代は30代で、次いで40代である。「変身プロジェクト」については、48.0%が「よいと思う」、31.5%が「よいと思うが難しいと思う」と回答している。
- 12) 「美の国あきたネット（秋田県公式webサイト）」
<http://www.pref.akita.lg.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1194860359244&SiteID=0>

付記 本稿は、平成20年度前期開講の教育文化学部基礎教育科目「総合ゼミ」において、日高・石沢・近藤が共同開設した講座「「県民性」の創出と再生産」で検討したものに基づく。受講者の遠藤愛梨（日本・アジア文化選修2年生）を交えた4人による共同研究の成果としてここに報告する。なお執筆は、1・4を日高、2を近藤、3を石沢が担当した。

【参考文献】

- 秋田県（2005）「県民と一緒に考える秋田の将来研究会 設置要綱」
- 秋田県（2006）『あきた21総合計画 第3期実施計画』
- 県民と一緒に考える秋田の将来研究会（2008a）「秋田人“変身”プロジェクト 報告書別冊 おらさもしゃべらせでけれ！」（HP「美の国あきたネット」より）
- 県民と一緒に考える秋田の将来研究会（2008b）『「秋田人変身プロジェクト 変わるか秋田人。」』（HP「美の国あきたネット」より）
- 中山健（2001）『語源探究秋田方言辞典』語源探究秋田方言辞典刊行委員会
- ハイパープレス（2000）『お国ことばのふしぎ大事典』青春出版社
- 日高水穂（2008）「秋田の「県民性」言説創出と方言」『新学部設置10年 21世紀の秋田大学教育文化学部（秋田大学教育文化学部新学部設置10周年記念誌）』秋田大学教育文化学部室山敏昭（2001）『「ヨコ」社会の構造と意味—方言性向語彙に見る—』和泉書院